

九州大学 正員 山崎 徳也

太田 俊昭

学生員 ○馬場光勝弘

1. 序言

1. 序言 板によりて構成される複合構造物は、連続スラブ橋やスラブ式ラーメン橋あるいは多層有梁板形式の構造物として、土木および建築構造分野に広く用いられている。しかし今日ところの種構造物の解析に関する研究例は数少ない。したがって、かかる構造物の解析理論の確立は勿論のこと、その力学的諸特性を解明把握することが合理的設計を行なう上で強く要望されることは当然である。そこで著者らは、有限要素法に基づいて任意四辺形板に対する Stiffness Matrix を導き、これにほりの要素を導入することによって有梁任意四辺形板に対する変形法公式の誘導を行ない、かつ上記複合構造物の解析の確立を試みた。

2. 任意四辺形板要素およびひずみ要素の Stiffness Matrix 板要素

2. 任意四辺形板要素およびひずみ要素の Stiffness Matrix 板要素の Stiffness Matrix の誘導には、R.J. Melosh, O.C. Zienkiewicz および J.H. Argyris の提案した手法があるが、本論文では、O. C. Zienkiewicz が用いた方法¹⁾を拡張応用して、任意四辺形板要素の Stiffness Matrix を求める。すなわち、図-1 のとく $y_0 = 0$, $y_1 = -cx/(a-d) + ca/(a-d)$, $y_2 = -(e-c)x/(a-d) + (be-ca)/(a-d)$ および $y_3 = ex/d$ の 4 直線で囲まれる四辺形板要素を考える。又軸方向のたわみ W^z を式(1)で定義すれば、 x, y 軸に関するたわみ角 $\theta^x = -\partial W^z / \partial y$, $\theta^y = -\partial W^z / \partial x$ はそれぞれ式(2)で与えられる。

$$\mathcal{W}^{\overline{x}} = \mathcal{W}/\ell_0 = [1 \ \bar{x} \ \bar{y} \ \bar{x}^2 \ \bar{x}\bar{y} \ \bar{y}^2 \ \bar{x}^3 \ \bar{x}^2\bar{y} \ \bar{x}\bar{y}^2 \ \bar{y}^3 \ \bar{x}^3\bar{y} \ \bar{x}\bar{y}^3] \times [\alpha, \alpha_2]$$

$$\alpha^x = \theta/12 \left[0, 0, -1, 0, -\bar{x}, -2\bar{y}, 0, -\bar{x}^2, -2\bar{x}\bar{y}, -3\bar{y}^2, -\bar{x}^3, -3\bar{x}\bar{y}^2 \right] \times \begin{bmatrix} x & y \\ z & w \end{bmatrix}^\top$$

$$\partial^2_{\bar{z}\bar{w}} = \frac{1}{4} \left(\partial_{\bar{z}}^2 + \partial_{\bar{w}}^2 \right) - \frac{1}{2} \bar{z} \bar{w} \partial_{\bar{z}}^2 - \bar{z} \bar{w} \partial_{\bar{w}}^2 - \frac{1}{2} \bar{z} \bar{w} \partial_{\bar{z}} \partial_{\bar{w}}^2 \quad (2)$$

五、六、三、四、二、一、江寧、新嘉興、蘇州、常熟、蘇州、常熟、江陰、

ただし、 $\bar{x} = x/a$, $\bar{y} = y/a$ また肩字下は転置行列を意味し、 l_0 は基準長である。

いま、板要素 $ABCD$ の任意の頂点 i ($i=A, B, C, D$)の変形成分と3次の列ベクトル $(U_i) = (U_i^x \ U_i^y \ U_i^z)^T$ で表わし、4つの頂点の変形成分を12次の列ベクトル $(U') = (U_A \ U_B \ U_C \ U_D)^T$ で表示すれば、式(1), (2)の元、すこしそれぞれ各頂点の座標値を代入することにより次式がえられる。

∴ (C) は 12×12 の正方行列である(表-1 参照)。

一方、頂点 i の変形成分にそれぞれ対応する同点の x 方向の力 $l_0 F_i^x$ および x, y 軸回りのモーメント M_i^x, M_i^y を同様に一括して3次の列ベクトル $(F'_i) = (l_0 F_i^x \ M_i^x \ M_i^y)^T$ で、また板の4つの頂点の諸力を同じく12次の列ベクトル $(F') = (F'_1 \ F'_2 \ F'_3 \ F'_4)^T$ で一括表示すれば、 12×12 のStiffness Matrix (K') を媒介として (F') は (U') の線型式として次式で与えられる。すなわち、

ここで、 (F') は荷重項であり、また (K') は既往の研究²⁾により次式で定義される。

1) 変換表示する必要がある。いま板要素 m に設置された直交座標 (x, y, z) を固定座標 (X, Y, Z) へ変換する変換行列 (L_m) を式(8)で定義すれば、次の関係式をつる。

$$(F') = (L_m)(F), \quad (U') = (L_m)(U) \quad \dots \quad (7)$$

∴ $(F) = (F_A \ F_B \ F_C \ F_D)^T, (U) = (U_A \ U_B \ U_C \ U_D)^T, (F_i) = (l_0 F_i^Z M_i^X M_i^Y)^T, (U_i) = (W_i^Z \ O_i^X \ O_i^Y)^T$
($i = A, B, C, D$)。

$$(L_m) = \begin{pmatrix} (I_m) & 0 & 0 & 0 \\ 0 & (I_m) & 0 & 0 \\ 0 & 0 & (I_m) & 0 \\ 0 & 0 & 0 & (I_m) \end{pmatrix} \quad (L_m) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & \cos\theta_m & -\sin\theta_m \\ 0 & \sin\theta_m & \cos\theta_m \end{pmatrix} \quad \dots \quad (8)$$

ただし、 θ_m は X 軸と x 軸とのなす交角である(図-1参照)。

式(4)に式(7)を代入のうえ (K') を $(K')_m$ と置いて整理すれば結局次式がえられる。

$$(F) = D_0 (K)_m (U) + (F') \quad \dots \quad (9)$$

$$\therefore K (K)_m = (L_m)^T (K')_m (L_m), \quad F' = (L_m)^T (F')$$

つづいて、長さ l_m に分割された 4 つ要素 AB に対するたわみ角式および捩り角式を式(4)と同じ形式に一括統合すれば次式をうる(図-2参照)。すなはち、4 つ要素 n に対して

$$(f_{AB}' f_{BA}')^T = D_0 (R)_m (U') + (ff_{AB}' ff_{BA}')^T \quad \dots \quad (10)$$

$$\therefore (f_{AB}') = (l_0 P_{AB}^Z M_{AB}^X M_{AB}^Y)^T, (f_{BA}') = (l_0 P_{BA}^Z M_{BA}^X M_{BA}^Y)^T, (U') = (U_A' U_B)^T,$$

$$(U_i') = (W_i^Z \ O_i^X \ O_i^Y)^T, (RK'_n) \quad (i=A, B), (ff_{AB}') = (l_0 P_{AB}^Z M_{AB}^Z M_{AB}^Y)^T, (ff_{BA}') = (l_0 P_{BA}^Z M_{BA}^Z M_{BA}^Y)^T,$$

$$(R'_m) = \begin{pmatrix} (R'_{AA})_m & (R'_{AB})_m \\ (R'_{BA})_m & (R'_{BB})_m \end{pmatrix}, \quad (R'_{AA})_m = \begin{bmatrix} 12l_m^2 & 0 & 6l_m \\ 0 & l_m & 0 \\ 6l_m & 0 & 4 \end{bmatrix}, \quad (R'_{AB})_m = \begin{bmatrix} -12l_m^2 & 0 & 6l_m \\ 0 & -l_m & 0 \\ -6l_m & 0 & 2 \end{bmatrix}$$

$$(R'_{BA})_m = (R'_{AB})_m^T, \quad (R'_{BB})_m = \begin{bmatrix} 12l_m^2 & 0 & -6l_m \\ 0 & l_m & 0 \\ -6l_m & 0 & 4 \end{bmatrix} \quad \text{ただし } K_m = (GJ)_m / (EI)_m, \quad \lambda_m = l_0/l_m, \quad \alpha_m = (EI)_m / k_m D_0$$

P_{AB}^Z, P_{BA}^Z : 中間荷重による材端 A および B における端せん力。

$M_{AB}^Z, M_{BA}^Z, M_{AB}^X, M_{BA}^Y$: 中間荷重による材端 A および B における固定端モーメント。(EI)_m, (GJ)_m: は 4 つ要素 n の曲げ剛性および捩り剛性。E: ヤング率, G: セン断弾性係数。

ここで変換行列 (L_m) を用いて式(10)を固定座標 (X, Y, Z) に関する式に変換すれば次式がえられる。

$$(f_{AB} \ f_{BA})^T = D_0 (R)_m (U) + (ff_{AB} \ ff_{BA})^T \quad \dots \quad (11)$$

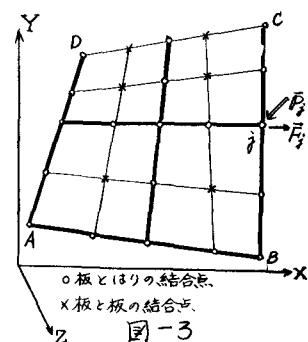
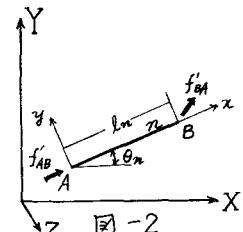
$$\therefore (f_{AB}) = (l_0 P_{AB}^Z M_{AB}^X M_{AB}^Y)^T, (f_{BA}) = (l_0 P_{BA}^Z M_{BA}^X M_{BA}^Y)^T$$

$$(R)_m = D_0 (L_m)^T (R)_m (L_m), \quad (ff_{AB} \ ff_{BA})^T = (L_m)^T (ff'_{AB} \ ff'_{BA})^T$$

$$(L_m) = \begin{pmatrix} (I_m) & 0 & 0 & 0 \\ 0 & (I_m) & 0 & 0 \\ 0 & 0 & (I_m) & 0 \\ 0 & 0 & 0 & (I_m) \end{pmatrix} \quad (L_m) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & \cos\theta_m & -\sin\theta_m \\ 0 & \sin\theta_m & \cos\theta_m \end{pmatrix}$$

ただし、 θ_m は部材 AB が X 軸とすす角(図-2参照)。

3. 有梁任意四辺形板の変形法公式 直線(4)が任意間隔で縦横に配置された任意四辺形板 $ABCD$ を想定し、図-3 に示すごとく適当な四辺形要素に分割する。任意節点 j における外力および板に働く不静定力の総和をそれぞれ \bar{P}_j および \bar{F}_j ($j=1, 2, \dots$) とし、固定座標 (X, Y, Z) を図-3 のごとく設置



すれば、節点 i における力の釣合式が次式で求められる。節点 i について

$$\sum(F_j)_m + \tilde{F}_j - \bar{F}_j + \bar{P}_j = 0 \quad (12)$$

ただし、 \tilde{F}_j は節点 i における板に及ぼす外力の合力を表す。式(12)式(9)を代入して整理すれば板全体の節点に対して次の剛性方程式をうる

$$\begin{bmatrix} (\bar{F}) \\ 0 \end{bmatrix} = D_0 \begin{bmatrix} (A^*) & (A^*) \\ (A_0) & (A_0) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} (U^*) \\ (U_0) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} (C^*) \\ (C_0) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} (\bar{F}^*) \\ (\bar{F}_0) \end{bmatrix} \quad (13)$$

ここに 0 : 零行列, $(C_i) = \sum(\bar{F}_j)_m + (\bar{P}_j)$, $(\bar{F}) = (\bar{F}_1 \bar{F}_2 \cdots \bar{F}_n)^T$ また添字 0 のある (F) , (U) および (C) はそれぞれ弹性支持点を除く節点の (F_i) , (U_i) および (C_i) を列ベクトルで一括表示したものであり、これに対して肩字 $*$ のあるものはそれぞれ弹性支持点のそれらを同様に列ベクトルで表したものである。一方、全節点から要素のみで構成されると仮定して場合の格子構造の解析と同様に固定座標を基準にして行なえば以下のようである。ただし実際にはより連結されていながら節点間のStiffness Matrix(これを零とおく。すなわち、任意節点 i における力の釣合式は

$$\sum(f_j)_m + \tilde{f}_j - \bar{f}_j = 0 \quad (14)$$

ただし \tilde{f}_j および \bar{f}_j はそれぞれ節点 j における外に及ぼす板の合力および外に働く不静定力の総和を表す。式(14)に式(11)を代入して式(13)と同一形式に整理すれば、結局格子構造全体の節点に対して次式が成立する。

$$\begin{bmatrix} (\bar{f}) \\ 0 \end{bmatrix} = D_0 \begin{bmatrix} (B^*) & (B^*) \\ (B_0) & (B_0) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} (U^*) \\ (U_0) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} (\bar{f}^*) \\ (\bar{f}_0) \end{bmatrix} \quad (15)$$

ただし $(C_i) = \sum(f_j)_m$, $(\bar{f}) = (\bar{f}_1 \bar{f}_2 \cdots \bar{f}_n)^T$, $(U^*) = (U_1 U_2 \cdots U_n)^T$ また添字 0 のある (f) , (U) および (C) はそれぞれ弹性支持点を除く節点の (f_i) , (U_i) および (C_i) を列ベクトルで一括表示したものであり、一方肩字 $*$ のあるものはそれと同様に列ベクトルで表したものである。さて節点 i に作用する不静定力を新たに (\bar{F}_i) で定義すれば、

$$(\bar{F}_i) = (\bar{F}) + (\bar{f}) \quad (16)$$

式(16)に式(13), (15)を代入してかつ $(\bar{F}) = -(\bar{f})$ なる関係を考慮して整理すれば次式をうる。

$$\begin{bmatrix} (\bar{F}_i) \\ 0 \end{bmatrix} = D_0 \begin{bmatrix} (A^* + B^*) & (A^* + B^*) \\ (A_0 + B_0) & (A_0 + B_0) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} (U^*) \\ (U_0) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} (C^* + C^*) \\ (C_0 + C_0) \end{bmatrix} \quad (17)$$

式(17)を展開すれば所要の変形法公式が次式でえられる。

$$(\bar{F}_i) = D_0 (K^*) (U^*) + (\bar{F}^*) \quad (18)$$

ここで $(K^*) = (A^* + B^*) - (A^* + B^*) (A_0 + B_0)^{-1} (A_0 + B_0)$, $(\bar{F}^*) = (C^* + C^*) - (A^* + B^*) (A_0 + B_0)^{-1} (C_0 + C_0)$ で (A^*) , (A_0) , (A) , (B^*) , (B_0) および (B) はすべて係数行列である。

4. 結語 はりの配置間隔が縦、横とも任意で、しかもその数が任意の有梁任意四辺形板のStiffness Matrixが式(13), (15), (18)より算出でき、これを用うればこの種板とはりで構成される複合構造物の解析が一般的に可能となる。²⁾ なおはりを単純な線体と考えず、幅の要素を導入したより厳密なStiffness Matrixを別に議論したが、これについては紙面の都合上割愛した。

(参考文献)

- 1) O.C. Zienkiewicz and Y.K. Cheung : The Finite Element Method for Analysis of Elastic Isotropic and Orthotropic Slabs, Proc. of the I.C.E. Vol. 28, August 1964
- 2) 山崎・太田・馬場先：点支承をもつ矩形板の変形法公式，第22回土木学会年次学術講演会 講演概要

昭和42年5月